http://www.ne.jp/asahi/chonan/kenkyu/　　email ： ch0330@support.email.ne.jp

全国長南会通信 52号

事務局 ：300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿 930　長南秀則 TEL/FAX　029-XXX-XXXX

発行日 平成 27 年 12 月 5 日

常陸国南部の長南氏　茨城県阿見町青宿

帆引き船が浮かぶ霞ヶ浦から筑波山を望む

関東平野の東にそびえる筑波山の南には、霞ケ浦が水をたたえている。この霞ケ浦の西岸の奥に土浦市があるが、その5km南の湖岸に阿見町（あみまち）があり、その中に青宿（あおやど）という所がある。長南姓は阿見町に約50世帯あるが、青宿が30世帯で、その大部分を占めている。

茨城県南部に位置する阿見町

つまり集中しているのであるが、ここの長南氏についてはその由来に２説がある。

1300年時代、室町時代が始まる頃に、長南氏はこの周辺にいたのではないかという説。しかし青宿の長南氏自体は、かつて上総国から来たということは代々伝えてきたが、その時期やその時の様子については何もわかっていない。

もう１説は長南和泉が1615年に上総国から一族の主力を率いて、最終的に松島湾寒風沢島を目指して落ちてゆくに当り、その直前に一族の若干を青宿の地に定着させたというものである。これは船本音羽の説である。

中村就一氏著書「長南氏の研究」を引用し、近年の状況等を次頁以降に写真を交えて紹介することにする。

目次 － 2 頁 阿見町周辺名所の写真、3.4 頁 青宿長南氏の由来、5.6 頁 青宿の祭り等

阿見町周辺の名所

あみプレミアムアウトレット、圏央道阿見東インターチェンジ直結。アメリカ西海岸をイメージしたショッピングモール

牛久大仏、高さ 120mで世界一高いとしてギネスブックに登録されている

（上）予科練平和記念館（外観）元海軍予科練習部の貴重な資料を展示している
（左）隣接する陸上自衛隊武器学校内、雄翔園の「予科練二人像」

土浦市水郷公園のイルミネーション、公園内のオランダ型風車周辺で、11 月後半から翌年 2 月まで飾られる(2015/11)

①土岐氏に属して来住

青宿の長南氏は、独自にかなり古くおおよそ1300年代すでにこの地方にいたとする。1380年頃、土岐氏が美濃国から来て、この地（信太荘）を治めていたが、長南氏は土岐氏に属していたとされている。土岐氏が滅びた後、領地は芦名氏のものとなり、豊臣秀吉の全国統一の行動の中で戦に敗れ、やがて改易となる。芦名氏の兄である佐竹氏が関が原の戦いの後、秋田に転封され、芦名氏の領地は伊達氏が領することとなり、仙台藩の飛び地となった。

亡びた土岐氏の家臣団の構成は、常陸国土着の者、および上杉氏の旧家臣すなわち、信濃からついて来た者、上野国から来た者および上総から来たた長南氏らとなっている。

土岐氏の旧臣が、土岐氏の菩提を弔うために1624年（寛永1年）江戸崎の管天寺で法要を営んだが、その時参集した人々の名簿が石引家文書として残っている。（竜ヶ崎市史）その中に青宿村から二名、吉田四郎右衛門と長南源三郎の名がある。

こうしてみると源三郎の祖先の長南氏は上杉について上総から来て、その後1387年土岐氏が来た時その家臣となったと思われる。つまり長南氏は1338年から1387年の問に、この地方に来たことになる。

② 長南（ちょうなん） 和泉守（いずみのかみ）の画策

1456年武田信長に占領された長南氏の領地（今の千葉県長南町）で、長南氏はなお生きのびていたが、1590年に武田氏が秀吉に降ったあとは、安房へ逃れて里見氏の家来となった。里見氏は、関東で佐竹と共に数少ない外様大名であったところ、佐竹が関ケ原役のとき西軍に荷担した故をもって秋田へ追われた後は、家康が関八州を親藩や譜代の大名ばかりで埋めたいと考えたこともあり、家康の冷酷な処分にあい、やがて、伯耆国（ほうきのくに）（今の鳥取県）に追放となるのである。

里見氏は、このような条件から、外様の雄藩伊達氏を何かと頼りにしていたようである。伊達領龍ヶ崎八千石は、龍ヶ崎から霞ケ浦の西岸毒にかけて広がっていたので、この頃里見氏の家臣として安房から鹿島へ頻繁に来ていた長南和泉守とも交流があったのだろう。

里見氏は一時期その軍事、政治の中心を鹿島の地へ移したといわれている。安房水軍に属していたとされる和泉守は鹿島の地へ頻繁に来航し、そのおり湖岸各地を視察していたのであろうと思われる。

主家改易の大事に際した和泉守は、鹿島の地の残務を整理する藩の重役を送り迎えるため、船団を指揮して鹿島地方へ往来していたとき、かねてから物色しておいた仙台領青宿の地に長南氏一族を移したものであろう。

青宿の地に一族を残し、さらに北上して松島湾の寒風沢島に向い３年後に定住した長南和泉守は、同島の一部で埋立を行い、定住する許可を仙台藩に申請したと思われる。

かくして和泉守は寒風沢へ渡る前に、青宿に長南氏６世帯と家臣１２人を住まわせることにした。そして大坂方の再起のおりには直ちに呼応して馳せつけるつもりであったと考えられる。

現在３０世帯ほどある青宿長南氏の祖先が、寒風沢に移住した一族の一派であることは、故長南正志氏など地元の古老が「千葉県長南町の殿様に仕えていた人達が、武士を捨てて土着した」と云い伝えて来たことによって明らかである。そして、判読しうる最古の墓碑は１６７３年であることから、時代的にも長南和泉守時代であることがわかる。

「青宿」という地名の由来については、この場所は草が青々と茂っていたので、青谷戸（あおやど）と呼んだ。それがいつか青宿と変ったという説がある。阿見町史編さん史料に、常州伊達氏常陸領の村別石高表が収録されているが、この表では村名を大宿（青宿）としてある。時代は１６０６年（慶長１１）および１６６３三年（寛文３）である。さらに大谷戸ではないかとも。青谷戸、大谷戸、青宿、大宿いずれにせよ「谷戸」つまり「谷の戸」であって「戸」とは入口の意である。　（「長南氏の研究」より）

青宿村のおこり

長南武（市郎兵衛）副会長宅に伝わる文書を拝借

今から７００年も前のむかしのこと、仙台の殿様が霞ヶ浦の東の方にある鹿島神宮へ、北の海からはるばると船に乗ってお参りにきました。

神宮のある関東の地は、東北の仙台よりも気候がおだやかで暖かく、土地は平らで広々としていました。その上、広いきれいな湖があって草や木が豊かに茂っていました。殿様は、この地がたいへん気に入り、お参りがすんでからも、何日もかけてあちらこちらと見てまわりました。

そうこうしているうちに、仙台に残してきた奥方のことを思い出し、一度この美しい関東の地を見せてやりたいと思い立ちました。さっそく、手紙を書いて家来を使いに出しました。

仙台では、殿様が無事にお戻りになるように、神様にお祈りしながら奥方が待っていました。そこへ殿様からの手紙が届いたので、奥方は何事が起こったかとおそるおそる手紙を開いてみました。

手紙を読んで、奥方は天にも昇るような喜びようでした。すぐに支度をして、家来たちとともに船で関東に向いました。

船が利根川から霞ケ浦に入って、鹿島神宮に近づいた頃にひどい大風が吹き荒れて、霞ヶ浦の奥の方に流されてしまいました。流れついたところは、まこもが青々と生えしげった岸辺で、その奥には草木が見事に美しい陸地が見えました。奥方と家来達はひとまず陸地に上り、粗末な小屋を建ててそこを宿にしました。何日かそこですごしているうちに、身ごもっていた奥方に赤ちゃんが生まれました。それでしばらくここにいて、からだ

を休めることにしました。そして、裏山に鹿島神宮をおまつりして、皆が無事に仙台に戻れるようにお祈りしました。

しばらく暮らしているうちに、奥方も家来たちもこの地がすっかり気に入ってしまいました。奥方のからだもよくなって、仙台に帰れることになりましたが、この土地からはなれにくい気持ちにりました。いろいろと考えた末、この土地を仙台藩の領地として、新しい村をつくることにしました。そして、長南市郎兵衛ほか６人の家来に村づくりの仕事を命じました。市郎兵衛等は喜んでおひき受けして、奥方のお帰りになる船をお見送りしました。

それからすぐに、６人の人達は土地をきり開き、田畑をたがやし、家も建てて立派な村をつくり上げました。裏山におまつりした鹿島神宮も、新しく建てかえて鹿島神社としました。

村の名前も青々と草木の茂った土地にできた住み家ということで「青宿」としました。その頃から始まった年中行事の一つで、「おばんず」という行事が今でも９月に行われています。

それは市郎兵衛家の裏山の竹をつかって竹筒をつくりそれに甘酒を入れて付近にまつられた神々にお供えするという行事です。仙台へ奥方が無事に戻り、青宿の村が立派にでき上がったお礼として、神様に甘酒を供えたものだと云い伝えています。

青宿のお祭り

①おばんず

毎年９月に青宿鹿島神社氏子の代表（当番の３軒）によって、長南市郎兵衛宅の裏山の真竹を切って作った竹筒に甘酒を入れて、鹿島神社の石碑や神木、また青宿に点在する特定の神々３６箇所にも甘酒をお供えする行事を行う。

この行事は古くから行われているものであり、一説には７００年くらい続いていると云わる。しかし「おばんず」という名前の由来などは残念ながらよくわかっていない。なぜ甘酒を、なぜ９月１５日に... なのか？９月中旬は旧暦では１０月中旬なので、おそらく、秋の新米の収穫を神々に感謝したものであろう。しかし、「おばんず」という響きが「おばんです」のようにも考えられるが、東北地方などの祭りや行事を調べても今のところ見当たらない。甘酒というと正月や大晦日に神社でふるまうのはよく見聞きするが、まだ残暑の時期にというのに違和感もある。いずれにしても、１２月の鹿島神社祭礼とセットの青宿の伝統的な神事だ。（4頁青宿村のおこりでも紹介）

②青宿鹿島神社祭礼

青宿鹿島神社の氏子代表は、座本（ざもと）、仲之町（なかのまち）、堤根（つつみね）と云われる３軒が担当し、当家（とうや）と呼ばれる。当家は神社の田圃を１年間耕作し、１２月中旬の祭礼の日に神様と氏子に今年の作柄を報告し、氏子全員で今後１年間の五穀豊穣、家内安全をお祈りする。

祭礼の前日に、当家３軒と翌年の代表になる「下働（したどう）」３軒は座本の家に集まり、祭礼の準備をする。神社の鳥居にかける注連縄（しめなわ）等を作成し、去年のものと交換し、神社拝殿、境内を清める。

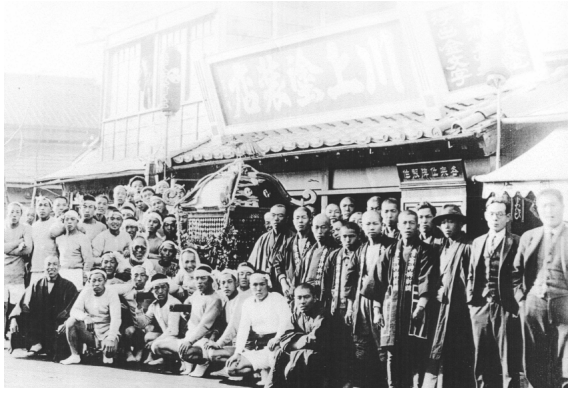
いよいよ祭礼の日、氏子が鹿島神社拝殿に集まり、神職による祝詞奏上、氏子の玉串奉天の後、氏子全員で甘酒を飲む。祭りを取り仕切るのは氏子総代と呼ばれる長老４人で、その中の代表は総奉行だ。最後に総奉行による神社式手締めで祭礼は終了し、続いて直会を行う。

祭礼が終わり、直会を行った後、今年の座本宅において、氏子総代と当家は、翌年の当家である、座本、仲之町、堤根を、下働のなかから決める会合を行う。翌年の当家が決定すると今年の座本の家にある御神体は翌年の座本の家に移され、翌年の祭礼の日まで座本が管理する。御神体の中には、今年の作柄や１年間の国内外の主な出来事などを総奉行が書き留めたものが保管されており、座本以外が中を見ることはご法度とされ、見ると目がつぶれるとも云われている。御神体の移動時は氏子総代を中心に旧代表、新代表で行列を作り、「下に一、下に」と声をかけながら、新座本が頭の上に御神体を掲げて歩く。青宿鹿島神社祭礼の夜は、さながら大名行列のようである。（写真②）

鹿島神社の石碑群　江戸時代のものが多い

③青宿祇園祭（ぎおんさい）

青宿八坂神社祇園祭礼は、毎年7月中旬に、宵祇園際、本祇園際、上がり祇園際と３日間に渡って行われ、宵祇園祭には、武器学校の霞ヶ浦に神輿を担ぎながら入る勇壮なお浜入（はまお）りを行い、本祇園祭には



土浦市川上塗装店での柿落とし（昭和７年）

青宿の各家を神輿が練り歩く。神輿の担ぎ手は青宿の青年会や消防団により受け継がれたが、平成２年（１９９０）青宿むつみ会が正式に組織され、以来現在まで祭り神輿巡幸の一躍を担っている。（写真⑤⑥⑦⑧）

神輿は昭和７年に、470円の金額で製作され、当時の柿落（こけらお）としの集合写真が残っている。（左）土浦市の塗装店で完成し、今まさに担ぎ出そうとしているものである。

☆☆☆

①青宿鹿島神社の鳥居
新しい注連縄がかけられる

②鹿島神社祭礼の御神体
12 月の青宿鹿島神社祭礼(5 頁)

③鹿島神社内庚申金剛像
元文５年庚申（1740）建立

④被爆跡記念之碑（碑文は 6 頁に掲載）

⑤青宿祇園祭（7 月） 神職による祝詞

⑥青宿祇園祭 お浜入り（霞ヶ浦へお清め）

⑦青宿本祇園祭（左） ⑧宵祇園祭園芸大会（上）

⑨「まいあみまつり」 毎年８月に開催される阿見町の祭りに、青宿むつみ会が参加する

⑩まいあみまつりには、姉妹都市米国スーペリア市、中国柳州市からの訪問者も参加する

⑪まいあみまつり 神輿巡幸のクライマックス

☆☆☆

中村就一さん宅を訪問しました

これまでは、中村さんに長南会通信を郵送していましたが、今回の通信 52 号から持参することにしました。お住まいの柏市は近年つくばエクスプレス開通等により、さらに発展しています。中村さんのお住まいはＪＲ柏駅の近くなので、我が家からは電車でも車でも約１時間と便利です。

平成 27 年 8 月

新会員のご紹介

<u>坂上美智代さん</u>
神奈川県藤沢市在住
山形県上田沢、長南茂三郎系
2015 年 8 月入会
今後ともよろしくお願いします。

年会費ありがとうございます

坂上美智代	藤沢市	2,000
長南武	阿見町	2,000
長南一男	足寄町	2,000
長南忠直	奈良市	2,000
千葉寛容	鶴岡市	10,000

（敬称略） 2015/07/08～11/30

良いお年をお迎えください

本年もお世話になりました。
来年もどうぞよろしくお願いします。
事務局長 長南秀則（茨城県青宿）